

山形 NEWS WEB

山形大 介護支援センサーを開発

09月06日 16時30分



ベッドの上に敷くだけで寝ている人の健康状態を把握できるシート状のセンサーを山形大学の研究グループが開発し、人手不足が深刻な介護分野などでの活用が期待されています。

山形大学の時任静士教授の研究グループは、印刷技術を使って、極

めて薄い電子回路を作る技術を開発しました。

この技術を応用して、厚さが僅か0.1ミリ、自由に曲げることができるシート状のセンサーが完成し、6日、大学で時任教授が会見を行って発表しました。

センサーは、ベッドの上に敷くことで、寝ている人の体の振動を感知して、脈拍や呼吸の状態を把握することができます。

このセンサーを介護施設で使えば、職員が頻繁に見回らなくても、入所者の体の状態が分かるため、人手不足の解消につながると期待されています。

また、屋外の建設現場などで、作業員の体に小型のセンサーを貼り付けることで、体温の変化などを把握し、熱中症の予防につながることもできます。

この研究は先月、国の補助事業に選ばれ、研究グループでは、3年後をめどに製品化したいとしています。

時任教授は、「人手不足が深刻な介護の現場や保育園などで、センサーの需要が見込める。地元の企業と共に実用化を進め、地域産業の活性化に結びつけたい」と話していました。

※この資料はNHKのニュース報道より転載しています。

